# 文化

ファクス 092(711)6243
メール bunka@nishinippon.co.jp

## 「なぜ行くのか」から「何をするのか」へ

### 【ミッション】宇宙ブームを探れ 後編

いまを、呼吸

全長50㍍もある巨大なH2ロケットの本物や人工衛星の実物大モデルが並ぶ、いわば宇宙ファンにとっての〝聖地〟。それが日本の宇宙開発の中枢、宇宙航空研究開発機構（JAXA）の筑波宇宙センター（茨城県つくば市）である。

宇宙飛行士を選抜し、養成する役割を持つ同センターは「宇宙に行きたい」という夢やあこがれを現実に変換していく場所として、漫画『宇宙兄弟』にもたびたび登場する。最近の宇宙ブームの影響で見学者は急増し、4月の特別公開日には前回（昨年秋）を5千人上回る約1万2千人が訪れた。宇宙飛行士を目指したいという人からの、採用条件や募集時期に関する問い合わせも増えている。

はやぶさや金環日食などで宇宙を体験、体感した人々を次の段階に誘おうと、JAXAは3月、1冊の本を作った。ブームに乗った企画ではなく、ブームに終わらせないための試みだ。

□□

「なぜ人は宇宙に行きたいのか、あるいは行きたくないのか。どんな宇宙船が必要か、なぜ宇宙の話は人を笑顔にさせるのか。この1年間、寝ても覚めてもそのことを考えてきました。まず私たち自身がその問いと答えを検証し、議論を始めることから、宇宙開発の未来を考えていきたい」。JAXAのエンジニア高橋伸宏さん(39)は職員有志約200人による「有人宇宙ミッションのミエル化」チームの先頭に立ち、アンケートやインタビューを重ねてきた。狙いは、日本の宇宙開発の実績と実力を知り、今後の目的地を定めること。その活動を一般向けに『日本の宇宙探検』という一冊にまとめた。500円とは思えないほど充実した内容だ。

高橋さんたちが提案している最大のテーマは「なぜ宇宙に行くのか」から、「宇宙で何をするのか」という問いへのスイッチだ。「例えば海外旅行。昔はとにかく海外に行くことが目的だった。そのうちどこで何がしたい、あれを食べたい、世界遺産にと目的が細かく明確になっていった。宇宙もそう。宇宙へ行くのは当たり前。じゃあ何でどこへ行って何をするのかという議論へシフトしたい」。JAXAと民間企業、市井の人々がコミュニケーションを重ねることこそが、宇宙探検の新時代を開いていくと信じている。

□□

人類初の有人宇宙飛行を達成したユーリ・ガガーリンが『地球は青かった』と語ったのは1961年。それから51年、人類から500人以上が宇宙飛行した。日本では92年、毛利衛さんが初めてスペースシャトルに搭乗して以来、8人の飛行士が宇宙へ行き、地球へ帰還した。いま、約300倍の難関を突破した新人3人が訓練を続け、その日を待つ。

彼らへの取材を長く続けてきた、宇宙取材歴20年のライター林公代さんも、ブームのその先に期待する一人だ。「現実にしか興味がなかったはずの女性たちが宇宙に関心を持ち始めている。このブームは本物」と感じている。と同時に、一般の人々の宇宙への視線や関心に物足りなさも感じ、新刊『宇宙就職案内』（ちくまプリマー新書）では宇宙開発をめぐる仕事の最新事情を紹介している。

「宇宙は、まだ夢と一緒に語られ過ぎている。遠くてお金がかかる夢物語という時代は過ぎた。GPS（全地球測位システム）をはじめ、私たちの生活は宇宙のインフラに支えられているし、宇宙関連の仕事場も増えている。もう夢ではない」

取材で無重力を体験したとき、林さんは「ほんの1、2秒」で常識を覆されるほどの感動を覚えた。「情報だらけの社会の中で、私たちは常識や正論にとらわれている。宇宙はそれを変えてくれる可能性を秘めている」。それが宇宙の魅力だと林さんは感じている。

□□

なぜいま、私たちは宇宙に引かれるのか。日本の「宇宙教育の父」とも呼ばれ、はやぶさ帰還時にはJAXAでスポークスマンを務めた、はまぎんこども宇宙科学館長の的川泰宣さん(70)に尋ねた。

「宇宙という視座は多面的で、考えるだけで心を豊かにしてくれる多彩な側面を持っている。はやぶさ帰還や宇宙兄弟の物語は、人々の情熱や努力、団結や友情によって、困難を乗り越えていけることを教えてくれた。経済の失速、3月11日の大震災など日本人が自信を喪失し、ぼうぜんとしていたとき、宇宙というスケールの大きな世界が響いたのではないでしょうか」

天文学者であり、哲学者のガリレオ・ガリレイ（1564～1642）はこんな言葉を残した。〈哲学はわれわれの目の前に拡げられているこの巨大な書物、つまり宇宙に書かれている〉

宇宙に書かれているものを、私たちはどれだけ読み取ってきたのか。人類はいまだ、宇宙を構成する物質の約4%しか把握しておらず、残る96%は未知の物質ダークマターとダークエネルギーが支配しているとされる。この「巨大な書物」をまだ何も読み取っていないに等しいのだ。私たちは未知のものへの抑えきれない興味と衝動として、夜空を見上げあこがれてしまうのかもしれない。

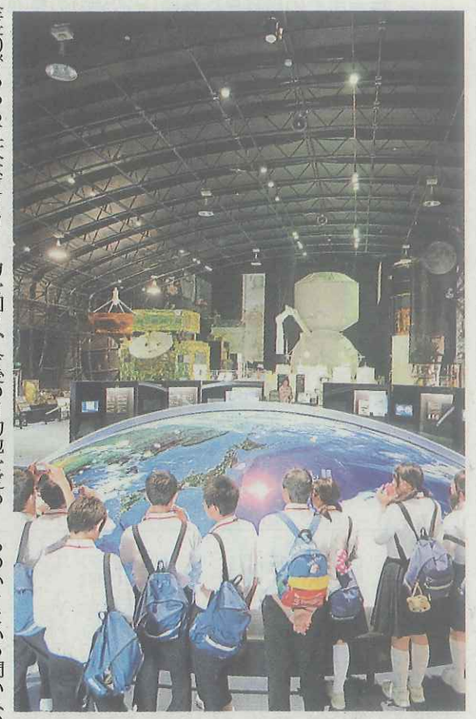
今回、人が宇宙にひかれる理由をさまざまな人と語り合った。私が一番好きだったのは、ライターの林さんの答えだった。

「なぜ自分がここにいるのか、自分の生命の元がどこでどう生まれたのかという『究極の問い』がそこにあるからじゃないでしょうか。私たちはあそこから生まれ、あそこに帰っていくという一体感。もし宇宙に行けたら、懐かしい感じがするのかもしれないって思っています」

この先、いつか日本の有人宇宙船が目指すのは月だろうか、火星だろうか。そう考えるだけでわくわくしてくる。「究極の問い」の答えが見つかるのは100年後か千年後か。

あす6日は金星の太陽面通過。次の105年後は見られないから、金環グラスを準備しておこう。

（塚崎謙太郎）



人工衛星の実物大モデルが並ぶスペースドーム＝筑波宇宙センター

的川泰宣さん

JAXA筑波宇宙センターで宇宙探検への思いを語る高橋伸宏さん

## 風車

### 蟾先生、逝く

はこの句を
を思う。
彼の構え
でも動かめ
寡黙で、隅
もふ事」を
映画を通し
きた。
「原爆の
いテーマに
「裸の島」
宿命にも、
先生は、
母さんに餓
息子の病を
婚する母を
母も身を粉
山ひとり旅
処からとま

## わた

思いのほか、
という時期に滞
れないが、夜は
る必要はなく過
がとても強い夜
こえてしまうこ
陰にはいってし
もほとんどかか
うにする。気温
るから脱水症状

たのだ。
けれども日差
陽がすぐ真上に
出するとすべて
しばする。ワイ
観光客やロコも
がサングラスを
いく。
わたしには膠
ので紫外線には